

光信公ゆかりの地紀行3

久慈から種里へ 光信公がくる



岩手県久慈で生まれた南部光信（後の大浦光信）は、延徳3年（1491）3月1日、鯨ヶ沢町種里城に入部しました。いったい光信は、どのルートを通って久慈から種里へ向かったのか？今回はその謎に迫ります。

当時、津軽地方では、十三湊（五所川原市）を支配していた安藤氏が南部氏に攻められて北海道へ敗走。その後、西海岸を中心に、津軽を奪還しようとする安藤氏と南部氏の激しい合戦がくり広げられていました。

この時、南部氏による津軽派遣軍の司令官として選ばれたのが、下久慈の領主で当時32歳だった南部光信でした。光信には、久慈から350人の軍勢が従ったとされています。



戦国時代の勢力圏と津軽への道



雪路を行く光信公の軍勢 切り絵「光信公一代記」(長尾金之助作)

■3つの道筋

光信が通った道筋について書かれた史料は残っていません。しかしこの時代、すでに南部氏は安藤氏との戦いに勝利し、津軽・下北半島まで支配地を広げていました。津軽には他に、南朝の雄・北畠顕家の末裔とされる浪岡北畠氏もいましたが、その勢力は南部氏によって支えられていました。久慈から津軽までの道筋は、ほぼ南部氏が掌握していたとみられます。

南部の軍勢が津軽に入る道筋は大きく3つ。主に①七戸から青森に出る北回りルート、②三戸から毛馬内(秋田県鹿角市)を抜ける南回りルート。さらに間道として③八甲田越えのルートがありました。

光信が種里城に入ったとされる旧暦3月1日は、今の暦でいうと春先の4月上旬。種里城跡の発掘調査では、女性の化粧道具を思わせる鏡、鍛冶職人がいたことを示す鉄器類も出土しており、軍勢とともに、家族やその従者、職人や人夫たちも一緒に連れて来たと考えられています。

3つの道筋のうち、どのルートを通ったかは不明ですが、雪深い津軽への道のりが、光信一行にとって苦難の道であったことは確かでしょう。

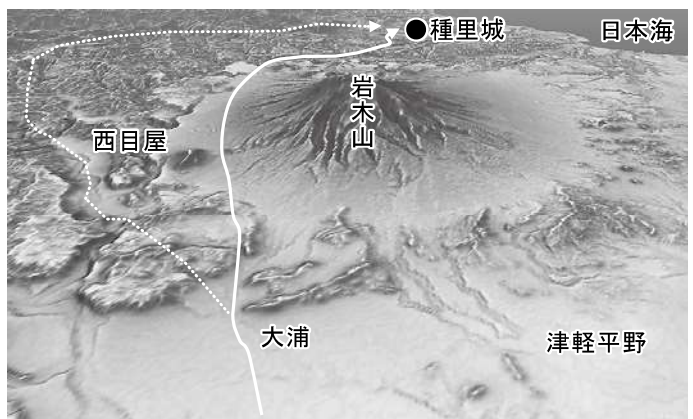
■光信、種里へ

さらに津軽に入ってから、種里城に行くには、その先が問題でした。檜山安東氏（安藤氏本家の廃絶後、秋田に再興）が日本海側から津軽への侵攻を繰り返し、鯨ヶ沢などの沿岸地域は、制海権をもつ安東氏側の勢力下にあったからです。

そのため光信は、津軽内陸部から海岸には出ずに、岩木山南麓の山道を通って赤石川上流の種里城に入ったと考えられます。現在、専門家の間では、



黒森にある「殿様の井戸」



種里城への道

安東の軍勢を退けながら、大浦↓岳↓松代↓黒森↓小森を通って種里に出たというルートが推定されています。道沿いには、後に光信が築いた大浦城（弘前市）、光信が休んだという殿様の井戸などの史跡が残っています。

一方、種里からさらに上流の大然にも、この時、光信一行を泊めたという伝承があります。大浦から西目屋を通り、白神山から赤石溪谷に入っていくルートだったのかもしれない。

今から530年の昔、光信とその一行が、どんな思いではるばる種里の新天地を目指したのか。その道中に、歴史が語らない数々の人間ドラマがあったように思えてならないのは、私だけでしょうか。

(町学芸員 中田)